

作：ソーン・ギウン <p>演出：多田淳之介</p>	Text: Kiwoong Sung <p>Direction: Junnosuke Tada</p>
出演 <p>チョン・ドンファン 小田豊 ハク・サンジョン 永井秀樹 マ・ドウヨン チョン・スジ 夏目慎也 ヘク・ジョンソン 佐山和泉 チヨ・アラ 伊東歌織 山崎皓司 大石裕弘</p>	Cast: <p>Donghwan Chung Yutaka Oda Sangjoo Park Hideki Nagai Duyoung Ma Sooji Joun Shinya Natsume Jongseung Baek Izumi Sayama Ahra Jo Kaori Ito Koji Yamazaki Masahiro Ohishi</p>

美術：島 次郎
美術助手：角浜有香、沼田かおり
舞台監督：ク・ボンクワン
舞台監督アシスタント：アン・キョンホ
照明：岩城 保
音楽・音響：チョン・ヘス
ドラマトウルク：マ・ジョンファ
演出協力：ミン・セロム
演出助手：チョン・ヒョン
翻訳：石川樹里
通訳・制作アシスタント：キム・ジョンミン
テクニカル通訳：滝浪 舞
小道具：ユ・ヨンボム
大道具製作：ジュ・キュンソク
衣装：キム・ジョン
メイク：チャン・キョンソク
メイクアシスタント：キム・グニョン
宣伝美術：町口 寛
字幕映像協力：浦島 啓 (colore)
プロデューサー：松井憲太郎 (富士見市民文化会館 キラリふじみ)、コ・ジュヨン
制作：矢野哲史 (富士見市民文化会館 キラリふじみ)

東京公演
技術監督：菅川英司
技術監督助手：河野 鶴
舞台監督：佐藤 豪
演出部：大蔵麻月
音響コーディネーター：相川 晶 (有限会社サウンドウィーズ)
制作：砂川史織、喜友名織江 (フェスティバルトーキョー)
インターン：金山咲恵、合田桃子、多田彰華、西本万那、山本菜絵
フロント運営：後藤由香理

記録写真：鏡田伸幸
記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

協力：岡村本舗、青年団、東京デスロック、快快、ままごと、ナイロン100℃、アマキオト

共同製作：富士見市民文化会館 キラリふじみ、第12言語演劇スタジオ、南山芸術センター (ソウル文化財団)、安山アートセンター (安山文化財団)
共催：独立行政法人国際交流基金、公益財団法人キラリ財団
主催：フェスティバルトーキョー

In co-operation with OKAMURA honpo, SEINENDAN, Tokyo Deathlock, faifai, mamagoto, NYLON100℃, amakioto
Co-produced by Cultural Centre of Fujimi City, KIRARI FUJIMI, 12th Tongue Theatre Studio, Namsan Arts Center (Seoul Foundation for Arts and Culture), Ansan Arts Center (Ansan Culture Foundation)
Co-presented by the Japan Foundation and Kirari Foundation
Presented by Festival/Tokyo



JAPAN FOUNDATION 国際交流基金

<p>ポスト・パフォーマンストーク</p>
11/27 (金) 15:00の回終演後　多田淳之介×岡田利規
11/28 (土) 18:00の回終演後　ソーン・ギウン×多田淳之介×島 次郎

<div> <div>フェスティバルトーキョー実行委員会</div> <div>顧問 <p>福原義春 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師</p> 名譽実行委員長 <p>高野之夫 豊島区長</p> 実行委員長 <p>萩田 伍 アサヒグループホールディングス株式会社 相談役</p> 副実行委員長 <p>市村作知雄 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 会長</p> 栗原 章 豊島区文化商工部長 東澤 昭 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長 尾崎元規 公益財団法人企業メッセ協議会 理事長、花王株式会社 顧問 熊倉純子 東京藝術大学音楽学部楽理環境創造科 教授 斉藤幸博 株式会社資生堂企業文化部長 鈴木敦子 アサヒビール株式会社経営企画本部社会環境部 部長 鈴木正美 東京商工会議所豊島支部 会長 永井多恵子 公益社団法人国際演劇協会日本センター 会長 小澤弘一 豊島区文化商工部文化デザイン課長 岸 正人 公益財団法人としま未来文化財団 専務 蓮池奈緒子 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 小島寛大 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事 鈴木さよ子 豊島区総務部総務課長 法務アドバイザー <p>福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)</p> </div> </div>	
<div> <div>フェスティバルトーキョー実行委員会事務局</div> <div>ディレクターズコミュニティ <p>市村作知雄</p> 副代表 <p>小島寛大、河合千佳</p> メンバー <p>葦原円花、喜友名織江、十万聖紀子、長原理江、横堀応彦</p> </div> </div> <div> <div>事務局長</div> <p>葦原円花</p> <div>制作</div> <p>小島寛大、河合千佳 喜友名織江、十万聖紀子、荒川真由子、砂川史織、松崎瑞希、松宮俊文、菅井孝子、岡崎由美子、三平文乃</p> </div> <div> <div>広報・営業</div> <p>経理</p> <p>長原理江、横川京子</p> <p>総務</p> <p>堤 久美子、谷口英和</p> <p>チケットセンター</p> <p>平田幸栄、蓮池奈緒子、一色壽好 佐々木由美子、佐藤久美子</p> </div>	

技術監督

技術監督アシスタント

河野 鶴

照明コーディネーター

佐々木真樹子 (株式会社ファクター)

音響コーディネーター

相川 晶 (有限会社サウンドウィーズ)

アートディレクション & デザイン

氏家密雄 (有限会社氏家プランニングオフィス)
naomi@paris.tokyo

メインビジュアル

ウェブサイト

広報

株式会社 フロントティア・エンタープライズ

広報協力

瀬川純子

海外広報・翻訳

ウイリアム・アンドリュース

物販

渡辺 淳

票券

株式会社ヴォートル

執筆・編集

鈴木理映子

<div> <div>Festival/Tokyo Executive Committee</div> <div>Advisors: <p>野村 寛 Man Nomura (Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh actor) Yoshiharu Fukuhara (Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.)</p> Honorary President of the Executive Committee: <p>Yukio Takano, Mayor of Toshima City</p> Chair of the Executive Committee: <p>Hitoshi Ogita (Advisor to the Board, Asahi Group Holdings, Ltd.)</p> Vice Chair of the Executive Committee: <p>Sachio Ichimura (Director, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ]) Akira Kurihara (Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City) Akira Touzawa (Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation)</p> Committee Members: <p>Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation) Sumiko Kumakura (Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts) Yukihiko Saito (General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.) Atsuko Suzuki (General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.) Masami Suzuki (Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima) Taeko Nagai (Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute [ITU/UNESCO]) Kouichi Ozawa (Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section) Masato Kishi (Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation) Naoko Hasuike (Representative, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ]) Hirotomo Kojima (Board Member, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ])</p> Supervisor: <p>Sayoko Suzuki (General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City)</p> Legal Advisors: <p>Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotti Dori Law Office)</p> </div> </div>	
<div> <div>Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat</div> <div>Directors Committee <p>Representative: Sachio Ichimura Deputy Representative: Hirotomo Kojima, Chika Kawai Members: Madoka Ashihara, Orie Kiyuna, Akiko Juman, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori</p> Administrative Director: Madoka Ashihara Production Co-ordinators: Hirotomo Kojima, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Akiko Juman, Mayuko Arakawa, Shiori Sunagawa, Luna Matsumisha, Toshifumi Matsumiya, Takako Yokoi, Yumiko Okazaki, Ayano Misao Public Relations, Sales & Planning: Rie Nagahara, Kyoko Yokokawa Accounting: Kumiko Tsutsumi, Miwa Taniguchi Administrators: Saki Hirata, Naoko Hasuike, Hisayoshi Isshiki Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato </div> </div>	
<div> <div>Technical Director: Eiji Torakawa Assistant Technical Director: Chizuru Kouno Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co. Ltd.) Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)</div> </div>	

<div> <div>Art Direction & Design: Yoshio Ujije (Ujije planning office) Main Graphic Design: naomi@paris.tokyo Website: Masaya Takeshita (Ujije planning office) PR: Frontier Enterprise Co., Ltd. PR Support: Yuko Yukawa Overseas Public Relations, Translation: William Andrews Merchandise: Jun Watanabe Ticket Administration: Netvo, Ltd. Writing & Editing: Rieko Suzuki</div> </div>	
<div> <div>Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ) Arts Council Tokyo & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture) Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute Asia Series co-produced by the Japan Foundation Asia Center Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd. Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKO, J-WAVE 81.3 FM Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd. In co-operation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association PR Support: Poster Hari's Company</div> </div>	
<p>Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2015</p> <p>Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan (2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)</p>	
<p>Period: October 31 (Sat) to December 6 (Sun), 2015</p>	

富士見市民文化会館 キラリふじみ

台風奇譚 태풍기담

ソーン・ギウン (作) ×多田淳之介 (演出)

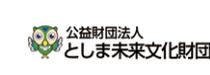
Cultural Centre of Fujimi City, KIRARI FUJIMI A Typhoon’s Tale

Kiwoong Sung (text) + Junnosuke Tada (direction)

11.26 Thu – 11.29 Sun

東京芸術劇場 シアターイースト

Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)



<div> <div>ASIAcenter</div> <div>INTERNATIONAL CENTER</div> </div>	<div> <div>Asahi</div> <div>アサヒビール株式会社</div> </div>	<div> <div>SHISEIDO</div> </div>	<div> <div>文化庁</div> </div>	<div> <div>2021 Arts Fund</div> </div>
---	--	---	------------------------------------	---

発行：フェスティバルトーキョー実行委員会
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしずがも創造舎
TEL：03-5961-5202 http://www.festival-tokyo.jp/

編集：鈴木理映子、フェスティバルトーキョー実行委員会事務局 デザイン：小林 剛 (UNA)

※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載



Festival/Tokyo

対談 ソン・ギウン×多田淳之介

2009年から共同制作を続け、2013年の「カルメギ」で、韓国の東亜演劇賞で三冠受賞という快挙を達成した、東京デスロックの多田淳之介と第12言語演劇スタジオのソン・ギウンのコンビ。チェーホフの「かもめ」で30年代の日韓関係を照射したふたりが、今度はシェイクスピアの「テンベスト」に20年代を重ね、歴史から手を伸ばして現代の胸ぐらを掴む。

（取材・文＝徳永京子）

——韓国の大きな演劇賞を受賞するなど、「カルメギ」が非常に高い評価を得ましたが、それは今回のプレッシャーにはなりませんでしたか？

多田　プレッシャーではないですね。参照項というか、自分の中の基準にはなってますけど。

——それを超えて当然という意味の、基準ですか？

多田　超えるというか、別物ですね。

ソン　私もそれはあまり感じていなかったと思います。それより、シェイクスピア（を題材にすること）ですね。シェイクスピアみたいな世界は、劇作家としても演出家としても扱ったことがなかったので。「カルメギ」はチェーホフの「かもめ」が原作で、あれほどうまく置き換えることが自分でできるのかというプレッシャーがありました。

「赦し」は難しい

——チェーホフは身近に感じるけれど、シェイクスピアには距離があるという話は、日本のポストドラマの劇作家、演出家からもよく聞きます。

ソン　それと『テンベスト』は、原作の結末が「和解」や「赦し」になっていますけれども、どうしてそんな簡単に和解するのがよくわからない。おそらくシェイクスピアが年を取ってから書いた最後の作品（単独執筆としては最後の戯曲と言われている）だから、そういった人生の境地もあるんでしょうけど。でも日韓の歴史を考えると、簡単に和解というエンディングにするのは難しい。その点では「カルメギ」よりも原作から離れていくことになるとわかっていたので、それがうまく書けるかどうかが問題でした。——では最初の段階から、結末は原作通りにしない

と決めていた？

多田　どの戯曲でやるか話している時からですね。候補のひとつに『テンベスト』があって、もしこれを日韓でやるんだったら、ラストシーンはあのままではダメだねって。

——なぜダメだと考えるのかを、それぞれにお聞きしたいです。

多田　和解というのは、共通の理解に至ってするものだと思うんですけど、僕は日韓ではまだできないと思っています。むしろ、和解できないままどう一緒に物事を進めていくかが大事だと思うし、僕達がやらなきゃいけないのはそれだと思う。だから、ラストを変えるというギウンさんのアイデアには賛成で、そこに行くまでをどうするかは任せました。

ソン　原作のプロットは、プロスペローという主人公が最初から、ずっと恨んでいた敵の息子と自分の娘を結婚させることを念頭に書かれていますよね。ヨーロッパでは敵国（の王族）と自分の子供を結婚させて、政治的な関係や権力を再編成することにそれほど抵抗がないらしいのですが、アジアではどうでしょうか。特に韓国の場合で言うと、日本の権力者の娘や息子と自分の子供を、今の言葉で言うと国際結婚させて、それが政治的なリベンジの代わりになるとか、失った権力を取り戻すことになるとは考えられません。

——未来への希望を込めてエンディングを和解にする、という選択肢も芸術にはありますよね。でも、そうはしなかった。

ソン　韓国の観客にとって、歴史の問題で日韓関係が和解まで行くのはまだ早い。整理されていない部分や、まだちゃんと対話できていない部分がたくさんあって、それを芸術で塗り替えるのは、そんなに簡単ではありません。特に今年が（第二次世界大戦の）終戦、韓国の言い方では解放ですけども、その70周年でもありますから、敏感になっている人は多いです。この作品でも（韓国公演の間に）反感や抵抗を感じる声はすでに聞こえています。

——それはTwitterなどで？

多田　はい、「親日の作品だ」という感想もあります。——日本人の私からすると、日本人の嫌な面がかなりねっとり描かれていて、むしろ「反日」の要素を強く感じましたが。

多田　そうなんです、日本人が観ると日本人が悪く描かれているっていう印象が、きっと先に来るんですよ。

政治のことを抜きにしくなくても仲良くなれる、個人レベルの関係が政治にも影響を与えられると、信じたいじゃないですか。



ソン　韓国人の反感の理由を考えるのが僕の担当で、日本人は多田さんが担当じゃないですか（笑）。

多田　僕の作品は、だいたいいつも反感を買うんです（笑）。

ソン　韓国で日本の植民地支配を描いた話ということ、日本人はステレオタイプの悪役として登場することがほとんどで、お客さんはそれに慣れています。でも『颱風奇譚』では日本人に、植民地支配の論理を語らせている。おそらくほとんどの人はそんな話を聞いたことがないし、韓国の劇場で敢えてそれを語らせることが、「この作品は親日じゃないか」と思われる理由です。

——既存の戯曲に、ある時代の日韓の関係をトレースしている構造は同じなのに、『カルメギ』よりもこちらのほうが何段階か複雑さのギアを入れていると感じました。

多田　たとえば小田（豊）さん演じる西大寺公爵は、永井（秀樹）さん演じる藤村男爵という軍人政治家みたいな人達よりは、朝鮮寄りというか、いろいろと理解を示してはいるんですけど、本当に朝鮮の立場を考えているかどうかは微妙です。本人はよかれと思って優しい言葉をかけても、朝鮮人にとって大事なことが何かは全然わかっていない。そのあたりは

かなり複雑になっていると思います。

ソン　藤村や宮部（海軍大尉。山崎皓司が演じる）みたいなタイプは、韓国の芝居やドラマでもたくさん登場しましたが、西大寺みたいな設定の人物は、あまりいなかったんじゃないかな。そういう人物をわざわざ登場させたことが、複雑さの原因のひとつでしょうね。

「政治的」を前提に

——翻つての質問なのですが、なぜお二人は共同制作の真ん中に政治的なテーマを置くのでしょうか？

多田　僕には、それが自然なことなんですけどね。日本と韓国について考えると、ごく自然に政治に目が向く。と言うか、今の日本で生活していて、政治のことを考えずに暮らすのは逆に難しいんじゃないかな。震災があって、その後の処理の問題があって、パッと日本を見渡せば、そういうものが普通に目に入ってきますから。震災前も政治の問題はあったはずですけど、ここまではっきり可視化していなかった。今や20代の普通の学生達がデモをする時代になって、そうすると演劇も変わってくるのが自然というか。つまり、必要だから政治的なことを作品に

入れているのではなくて、今の日本で演劇をつくると、自然と政治的なことが入ってくるという感覚です。演劇を使って政治的な何かを変えたいということではないんですけど。

ソン　僕は韓国語で考えて自分の頭の中で訳して日本語で話すので、どれだけうまく理解して話せているのかわからないんですけど、政治とか政治的という意味が、韓国語と日本語ではもしかしたら少し違うかなと思ったりもします。というのも、何が政治的で、何が非政治的かということが、ちょっとわからなくて……。演劇を、プライベートな世界（を描いたもの）か、社会的なことを意識したものかに区別することはできると思うんです。例えば恋愛の話だとプライベートだし、どの党に投票するかという話なら政治的なのもかもしれない。でも『颱風奇譚』は、歴史的可能性がいけれども政治的かどうか、僕にはわからない。（自分の意識としては）社会的で歴史的な作品でもある、ですね。

多田　そうですね、社会的と政治的（の区別）は難しいですね。

——質問者の私が、その違いをきちんと考えていませんでした。ギウンさんのお話で、政治的と社会的、それと歴史的という言葉を雰囲気を使い分けていたと気付かされました。答えにくい質問にしてみましたらすみません。

ソン　例えば日韓関係について、日本の方が「政治的な関係は難しいけれども、それとは別に個人レベルの関係では仲良くしよう」と言います。それはものすごくいいことで、僕も同じ気持ちなんですけど、でも考えていくと、「政治的な関係」と「個人レベルの関係」をどこで線引きするのか、わからなくなるんです。やっぱり（一方が一方に）影響されますよね、韓国というか僕の場合では。だからこそ、政治のことを抜きにしくなくても（個人同士が）仲良くなれること、そして、個人レベルの関係が政治にも影響を与えられることを信じたいじゃないですか。

——問題を切り分けて目先の答えを求めずに、痛みを伴っても本質的な解決につながる道を行ったほうがいいということですね。まさに日本と韓国の歴史への向き合い方の違いだと思います。

多田　韓国の人と話していて印象的だったのは、日本人の作品は問題を迂回しているんじゃないかと言われたことです。それは凶星だと思って、なぜ直接的にできないんだろうと考えさせられました。

例えば日本では、政治的な発言を積極的にする人は、ちょっと変わった人だと受け取られる。政治的な意見を持つ作品をつくとすぐに「左翼だ」「右だ」と言われますし。そこをどう避けて社会に呼応した表現を目指していくかが難しいんですけど、それはいつも考えています。ただ、僕らの共同制作が政治的だと言われるとしたら、半分以上は僕の責任ですね（笑）。

ソン　僕は今までは、どちらかという和政治でない作品をつくっていました（笑）。日常をリアルに描くような仕事がスタートです。最近はそのようなリアルイズムから少し離れて、多田さんとは違うかもしれませんが、同時代性を意識した作品もつくるようになりましたが。そんな僕が、第一次大戦と第二次大戦の間の1920年代を題材にした戯曲を書いて、多田さんは演出家として“今ここ”でお客さんにお見せすることを考えて演出する。この日韓のコラボは、すごく歴史的で政治的な作品になっているのかもしれないね（笑）。



ソン・ギウン（左）
劇作家、演出家。第12言語演劇スタジオ主宰。1974年生まれ。2009年から本格的に劇作、演出活動を開始。質的的な感情表現から脱皮した戯曲で数回な作品作りで注目を集める。1999年に交換留学生として来日して日本語を学んだことをきっかけに、平田オリゼ、野田高梧、多田淳之介など、日韓現代演劇の交流や共同制作、日本の現代戯曲の翻訳にも携わるようになった。

多田淳之介（右）
演出家、俳優、富士見市民文化会館キラリふしあみ舞踊塾、東京デスロック主宰。1976年生まれ。俳優の身体、観客、劇場空間を含めた、演劇一環にフォーカスした演出が特徴。古井から現代劇、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。「演劇101」を公出し、地域、教育機関でのアウトリーチ活動も積極的にを行い、韓国、フランスでの公演、共同制作など国内外問わず活動する。